

刊行の辞

理事長 山崎 吉朗

「英語をはじめとした外国語教育の強化に文科省は取り組んでいる。」

大槻達也国立教育政策研究所所長の挨拶の一節です。同研究所主催のシンポジウム「初等教育段階における英語教育を考える～グローバル人材の育成に向けて～」(2016年1月19日)の時です。著者の知る限り、このような公式の場の挨拶で、英語以外の外国語の存在が示唆されたのは、一昨年開かれた英語有識者会議の冒頭で、JACTFL 副理事長でもある上智大学の吉田研作先生が、「さまざまな外国語があるがまずは英語について議論」という趣旨のことを言われたことくらいしか思い浮かびません。JACTFL の目標に合致するたいへん重要な発言となりました。学習指導要領の教科名は外国語であり、英語は言うまでもなくその一科目に過ぎません。文科省が公式に取り上げる場合は、あくまで「外国語」なので、本来ならばシンポジウムのタイトルも「初等教育段階における外国語教育を考える」でなければいけないわけです。所長の挨拶は文科省の本来の姿と言えるでしょう。私たちの考えているような意図があったのかどうかはわかりませんが、公式の場での挨拶ですので、今後さまざまな場で積極的に引用していきたいと考えています。

英語一辺倒の現状打破が JACTFL 設立の何よりの目的です。2012年12月3日に産声をあげた JACTFL は4年目を迎えました。研究会誌も第3号となり、2016年3月13日には第4回のシンポジウムを上智大学で行います。グローバル化＝英語化となっている偏狭的な状況の中で、JACTFL の果たす役割はさらに大きくなっています。冒頭に書いたことばが今後、実のあるものとなるよう、JACTFL は傍観するのではなく、積極的に様々な多言語推進の動きに関わっていきたいと考えています。

JACTFL の定款第3条の目的には次の様に記しています。

「当法人は、あらゆる言語、教育段階の垣根を超えて外国語教育関係者が連携・協力して、多言語多文化が共生するグローバル社会に対応する多様な外国語教育を推進することを通じて、我が国における外国語教育及び外国語学習の質的向上と普及を図るとともに、21世紀を生き抜く若い世代の育成と我が国の学術振興及び諸外国との相互理解に寄与することを目的とする。」

第4条の事業は次の7項目を掲げています。

- (1) 多様な外国語教育関係者や諸団体との連携・協力
- (2) 多様な外国語教育に関する啓蒙と提言
- (3) 多様な外国語教育に関する研究・調査・研修
- (4) 多様な外国語教育に関する環境整備
- (5) 多様な外国語教育に関する研究誌・報告書・資料等の刊行
- (6) その他当法人の目的を達成するために必要な事業

本研究会誌発行は、JACTL の目的達成のための事業の中心の一つです。本号には、特別寄稿 1 本、論考等8本、昨年度のシンポジウム報告と、昨年にも増して充実した内容が掲載されています。すべての寄稿者に感謝致します。中でも大阪大学名誉教授である大谷泰照先生の巻頭論文には心から感謝を申し上げます。先生には JACTFL 設立の趣旨にご賛同の上、昨年入会していただいたので、この機会に思い切って寄稿をお願いしたところ、すぐにご快諾いただきました。

昨年までは、「政府や議員はもとより、教育の方向性を論議する中教審ですら、残念ながら英語以外の教育について発言する委員の方は皆無です。」と現状を嘆くだけでしたが、今年は拙稿の「声をあげる ～文部科学省、東京都への提案、要望」に詳しく記しているように、ともかく声をあげ、文科省や東京都への訴えを始めています。現状を憂えているだけでは何も変わらないので、たとえ無駄骨になったとしても、さまざまな働きかけを行い、私たちの声を届けようとしています。英語に関わることしか語られない中教審の外国語教育ワーキンググループでも英語以外な外国語教育が少しずつ話題に上るようになってきています。これも私たちの訴えの成果だと信じています。本研究会誌もその姿勢を示しています。

創刊号で、「簡単な道ではないが、さまざまな外国語教育関係者が手を組み、世論を作っていくことは不可能ではない。ともかく一步一步進む。この会誌第 1 号もその一歩だと信じている。」と書きました。第 3 号も同様です。冒頭に掲げた目的達成のために、一步一步進んで行きたいと考えています。次の一歩としての第 3 号です。これで会誌は少なくとも 3 歩進みました。毎年毎年、着実に積み上げていきます。

最後になりますが、昨年同様、広告が掲載されています。4 年目でまだ財政基盤のできていない JACTFL にとってたいへんありがたいことです。これは一昨年ある賛助会員の方からの自発的な提案があり、昨年から掲載しているものです。この研究会誌のみならず JACTFL の活動全般を大きく支えて下さっています。この場を借りて厚く御礼を申し上げます。

(一般財団法人日本私学教育研究所)